



暑く鬱陶
しい話

川崎ゆきお

「鬱陶しい空模様だねえ」

「気持ちまで鬱陶しくなるよ。その前に体が持たん。体が湿気ておる。体の中にカビが生えそうじゃわい」

「梅雨が明ければ、からっとした夏が来ますよ」

「今度はその暑いのが苦手でああ」

「梅雨の晴れ間も暑いでしょ。もう夏が結構行ってますよ」

「何処へ行ったって？」

「夏がです。三分の一ほど過ぎてますよ」

「そんなに過ぎたか」

「だから、暑いのもしばらくですよ。一ヶ月ほどですよ」

「そうか。しかし、毎年夏が長い。暑いのが長い。これさえ過ぎてくれればいいんじやが」

「夏が行くのを待っているのですか」

「ああ」

「それはもったいない。暑いときには暑いときの過ごし方があると思うのですがね」

「夏は、夏休みなんで、何もせん。毎年じっと我慢して涼しくなるのを待つのみ」

「それはもったいない」

「じゃ、どうするんだ」

「そうですねえ。夏山もあるし、海もあるし」

「スポーツは苦手だ」

「夏はソーメンですよ。あの冷たいソーメンです。ざるそばでもいい。ああいうのは夏に食べてちょうどです。スイカなんかもね。冷たいキャンディーやアイス クリームも、水ようかんもいいですねえ。この時期がいい。かき氷なんて、食べると寒くなるほどですが、夏には楽しめますよ。僕は宇治金時だなあ。冷たすぎるので、アンで舌を温めたりね」

「食べるものねえ。しかし、私は腹をすぐに壊すので、冷たいものは避けておるんだ。豆腐も冷や奴じゃなく、湯豆腐で食べます」

「よほど夏が苦手なんですね」

「梅雨と夏が苦手です」

「じゃ、やはり、じっと我慢して通り過ぎるのを待ちますか」

「はい。ところで、あなたは」

「僕も人に言ってるだけで、実際には暑いと何もやる気がしなくて、ぐったりしているだけです」

「じゃ、私と同じじゃないか」

「しかし、楽しみにしていますよ」

「宇治金時をかね」

「それもありますが、夕涼みとか」

「夕方でも暑いじゃろ」

「夕立の後、涼しいときがあるんです。これは極上です」

「ほう」

「極楽にいるほどに」

「まあ、たまに凌ぎやすいときがありますなあ」

「そうでしょ。私はそれを神様がくれた贈り物だと思っています」

「あんた、勧誘かい」

「違います。神じゃなく、天でもいいです。天がくれたプレゼントだと」

「大層な」

「やはり、暑さに弱いからこそ、体験できる有り難みなんですよ」

「しかし、滅多にそんなときはない。一瞬じゃ」

「その一瞬がいいんですよ」

「まあ、ものは考えよう、受け取りようとしておきましょう」

「雨で鬱陶しく、暑さでぐったり、それもまた……」

「また？ 何かね」

「忘れました」

「何か、言い掛けたんだろ」

「いや、言ってしまうと、有り難みがないです」

「そうか。しかし……」

「何ですか」

「話していると、雨の鬱陶しさを忘れていたよ」

「ああ、その手もありましたねえ」

「だろ」

了